

■□ 開会挨拶

若林 靖永（佛教大学：本研究所前理事長）



当研究所の理事長を務めております若林靖永でございます。皆様、今日は本当にお忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

研究所は1993年に設立され、2023年に30周年記念事業として、皆様とともにこの30年を振り返り、そして祝うという機会も設けさせていただきました。また、今年2025年は、昭和100年、戦後80年ということで、戦後の日本の歩みの中で何が出来て、何が残された課題みたいになっているのか。歴史というのは一つの事実としてあるという見方もあります。今を生きる私たちがどう受け止め、未来につなげて行くのかという意思や気持ちが問われているものでもあります。そういう意味でも、私たちはいろんなことを受け止め、こういう年の中で開かれているということを改めて考えてみたいと思います。

昨年の総会では、協同組合で活躍する若者に焦点を当てようということで進めて参りました。そこで、今回の総会記念シンポジウムはそれを受け、生活協同組合における人づくり、いわゆる人材育成というテーマを主に挙げています。

というのも、皆様もご存じのように、昔の日本ですと、会社が一つの共同体であり、家族として会社を守られていたとも言えますし、会社に従属していたと言っても過言ではないような働き方でした。まあもっとも、それは専業主婦がいて成り立つような一つの社会モデルだったとも言えますが、戦後の日本経済はそういう形で急成長を遂

げた時期がありました。

しかし、今日、多くの若者は会社に対してそこまで深いコミットメントや帰属意識を持って勤めるなど、もう嫌だという状況になっています。一人一人の生き方や考え方もっと尊重することが、ある意味当たり前になってきているという状況の中、生活協同組合が今後とも活躍していくためには、それを担う職員が自らを協同組合人として、生協で働く者として、自分はなぜここで働くのか。何をめざし、何を喜びとして働くのかということを考え、そこから協同組合の面白さなり、協同組合が大切にしていることを自分自身のものとできるかと、そういうことが問われていると思います。

ですから、昔の会社人間のようになって働くことが拒否される中、今働く生協職員、特に若い職員が生活協同組合で働くということを、いかに自分自身の生き方と重ね合わせながら楽しみ、充実した毎日が送れるか。そういったことは、今後の生協の発展にとっても決定的な課題であり、重要なポイントになります。今日はそういったことを考える場でありたいと思います。

また、今年は国際協同組合年ですので、今回の総会記念シンポジウムではそれに関連するイベントといたしまして、協同組合アイデンティティの原則改定をめぐる特別講演も用意しております。協同組合のアイデンティティはどのように変わってきて、いまどのような課題があるのかについても学びながら、ともにこれからの協同組合に

ついて考えて行ける場にできればと思います。

私からの開会の挨拶は以上とさせていただきます。皆様、本日は、どうぞ、よろしく願いいたします。